

月刊



編集発行 一般社団法人 西宮市老人クラブ連合会 〒663-8233 西宮市津門川町2-28 西宮市福祉会館 電話 0798-34-3334

こんにちは！「あいさつ」から広がる友愛活動



「夕日」写真提供 田中 積氏 (用海校区)

景気回復と経済再生を掲げてきたこの一年が
いま終わろうとしている

希いと国策の間で見込み違いに戸惑いながらも人々は
雄大な里山に抱かれ季節に寄り添い過ぎしてきた

出荷待ちの門松 福玉 菰樽 オレンジのカーテン
迎春ムード漂うなか

冬將軍は愛車、木枯らしで駆けまわり

ワラ帽子の下から冬ボタンが鮮やかに裾野を染める



高齢者の貧困を描く、ドキュメント番組を見た「新聞記事より」その中に登場したとある女性。

▼職人であった夫亡き後、自宅で一人暮らしをしている。彼女はベッドからリビングまで杖を突いてやつの思いで移動する状態である。▼その彼女の経済生活はこんな具合である。毎日ヘルパーさんに一日2時間来てもらって家事と介護を頼み、その介護保険の自己負担額が月3万円ほど、他にガス・水道・電気代などの必要経費を引くと、手元に残るお金が月2万円ぐらい、これが食費と雑費になる。▼ちなみに子ども(娘)が嫁いでいるが既に娘も年金世代、仕送りはなくこの姿を見てどう思ったか、何人かの同世代に感想を求めてみた。『もう悲惨すぎる。この国の低レベルの福祉政策に泣けると嘆く人が、多数であったとある。▼果たして実際そうだろうか？彼女の夫「自由業」職人、若いころには多くの収入があったはずだが、老後の生活設計を誤ったのではないだろうか。▼国民年金だけの老後に備え、多少の貯金をしておくべきだったと、冷静に判断する人もいる。立場でいろいろだが高齢者に突入する前に、将来のことを考えておくべきだと思う。(春風校区 藤川)

市老連理事会 11 / 12

11月27日(木)

西宮老人福祉センター

【議案事項】

- ・ 県老連への再加盟決議について
- ・ 市老連「愛称」募集PTから

最終選考について

- ・ ことぶきバス積立金PTから
 - ・ バス積立金(使用料)の値上げ
- 提案について

【報告事項】

〈広報部〉

- ・ 月刊「いぶき」
 - ・ 月刊「いぶき」
- (第183号11月号) 発行済
- (第185号1月号)

原稿依頼(原稿締切1月14日(水))

〈文化教養部〉

- ・ 委員会の開催
- ・ 12月12日(金)13時30分
- ・ 高齢者芸能大会10月30日(木)の報告
- ・ カラオケ教室

西宮老人福祉センター

11月7日、14日、21日 各(金) 13時

〈体育部〉

- ・ 第2回高齢者体力測定
- ・ 11月14日(金)の報告
- ・ スポーツ「吹矢」大会の開催

〈女性部〉

- ・ 第2回健康講座11月28日(金)の開催
- ・ 13時30分 西宮老人福祉センター

〈プロジェクト部〉

- ・ 会員増強(片山チームリーダー)と
 - ・ 単位老人クラブ活性化支援
- (門脇チームリーダー)の報告

〈事務局〉

- ・ ことぶき研修バス(2月)の割当
 - ・ 新年互礼会(1月14日)の開催
- 会費1,500円

※次回の定例会

12月10日(水) 西宮老人福祉センター
三役会…10時
理事会…13時30分



老人クラブ連合会

校区会長便り No.21

前会長 井上公雄さんの事

安井校区 会長 塩川 彰

井上さんは歴戦の勇士である。昭和13年、21歳で赤紙召集、3カ月間の新兵教育、豊橋の陸軍予備士官学校で短期の研修を受け中国大陸へ。以後東南アジア五カ国を転戦。29歳で敗戦除隊まで8年間最前線で戦い帰還。

彼の前では絶対対等ではならない禁句があった。「またも負けたか八連隊」彼は声を震わせて否定した。彼の自慢はフィリピンから逃亡するマッカーサーが乗った専用機を望見したことであつた。何回聞かされたことか。

日本人はなぜ戦場に日本刀を持参したのか? 自決用か? 武士道とはあくまでも個人的人生観である。戦う前に死を考えていては、近代戦には不可欠の合理的倫理的作戦は実現できない。一億玉碎と叫んでいたが日本は勝つつもりだったのか? と彼に問うと「帰ってください」と追い出されました。

井上さんや夙川の遠藤さんは青春を戦場に捧げた。その体験は筆舌に尽くせぬものであるがゆえに、逆鱗に触れるものであつたと思う。

井上公雄さん平成21年死亡享年92歳

献句 歴戦の勇士よ眠れ雲の峰

越水城跡の歴史

大社校区 会長 中村 二郎

校区中央に位置する旧西国街道沿いの小高い丘に、観応2年(1351)足利尊氏と弟直義が戦った小清水の陣所跡、その後瓦林正頼が永正13年(1516)に越水城を築城した。南北200m、東西100mの広さで街道の要衝として、城に欠かせぬ水に恵まれて築城に適地であつた。応仁の乱後戦国時代に入り、永禄9年(1566)足利幕府十四代將軍義榮が入城したが3年後の永禄11年織田信長の入洛により、越水城の戦略的価値が消えた。明治に入り明治29年(1896)この城跡に大社尋常小学校を設立した。

当時は遠くから通う小学校であつた。高台からは大阪湾をへだてて河内、和泉、遠くは紀伊の山々を望む素晴らしい環境に恵まれた学校であつたが、その後の都市開発によって眺望は望めなくなつた。

しかし、今も近くには戦国の世以来湧き続ける清水が地名となり、3カ所の泉こそ越水城を語り継ぐ証人として大切に保存されている。

現在、大社小学校東南の角に城跡の石碑と、市教育委員会設置の史跡説明板が置かれている。

(市教育委員会資料より抜粋)



「幻の伝統野菜」
大市茄子を見る会・
食べる会 開催される

甲東校區 門戸喜楽会

会長 田中 邦彦

去る7月20日(日)、快晴のもと40名(内老友会16)の参加で実施されました。今回は伝統野菜である大市茄子の栽培風景を見学するとともに、甲東地域の町並み景観・歴史(史跡)を探访する事を目的にガイドマップも作成されました。

はじめに甲東園駅の歴史説明があり、駅前商店街のリトル・アジアと呼ばれている町並みを探访。上大市庚申塚では、庚申信仰の説明の後、仁川学園の道標を巡り山之井顕彰碑へ。ここで江戸期における水(灌漑用水)がいかに重要であったかを再認識しました。また、水天宮(西廣寺)にも多くの史跡があり一同「上向き地蔵」に興味津々です。いよいよ本命の茄子の栽培場所へ。「大市の茄子は色は悪いし、形も悪いが味はよし」との段上で唯一の栽培農家であるM氏から説明。女性陣は茄子より食べられる「ほうずき」に興味を持った方もありましたが、栽培上交配が起こらないように一畝おいての作付けなどの苦勞話も聞かれました。お土産に採りたての大市茄子を



いただきニコニコ顔で次の探訪場所へ。土蔵を眺めながら中津浜線へと歩くうちに、町中とは思われない静寂なところにカルメル会の教会(修道院)が現れ、心が清められた気持ちになりました。

松浦自転車店前から旧西国街道に入り、大市会館前に建つ大市茄子苗頌徳碑で、一時絶滅したと言われた大市茄子を復活させたK氏からお話がありました。高木西町在住のK氏は「ひょうご在来種保存会」に属されており、種子発見から確認に至るまでの経緯を説明。そのあと永福寺の延命地蔵・下大市庚申塔・行者堂を巡りイベント会場に。場内で茄子の創作料理を肴に冷えたビールを飲みながらの親睦会となりました。先人たちの残した歴史を守り継承する事の大切さを痛感したひと時でした。「来年もぜひ」との要望に「それじゃまた頑張るぞ」との思いです。

たわわに実る
ブドウに興奮

今津校區 広報部 大段雅子

残暑が残る8月28日、当校區連合会ではことぶき研修バスで三木市の里脇観光ブドウ園に行きました。8時半に出発、10時に到着しました。

園一面には品種ベリィAのブドウがたわわに実っています。参加の50人は甘そうなブドウを選んで、一房をはさみで切り試食しました。「甘くてジューシイ」「もぎたての味は違うわ」等々、シニアたちは自分で選んだずっしり重いブドウに大満足。食べ放題といっても半房ぐらいでお腹いっぱいになります。

お土産に思い思いのブドウを切り取り、買い求め、バスの中はブドウの芳潤な香りに、まるでブドウ畑に



いるようでした。昼食後、三田のアウトレットに行き、ブランドもののウインドウ・ショッピング。若向きの服や雑貨がシニアたちの目を楽しませてくれました。

広報部委員会より

10月17日各校區広報部委員15名の出席の下、賑やかに会しました。月刊「いぶき」と新春号1版の紙面説明を。「頑張るサークル活動」は香櫨園校區の折り紙教室を、また夙川校區からは校區で活発に活動されている各種のクラブ活動を取材させていただくことに、高齢者万歳は生瀬校區からお二人に登場していただきたく以上よろしくお願いいたします。悩みはどの校區とも団塊の世代が興味を持ってくれない・会員の高齢化などが問題になっているようです。質疑では「世を挙げてカラーの時代。なんとかカラー刷りは出来なにか」の意見が圧倒的に多くありました。コスト面もあり検討事項とさせていただきます。(広報部 足立)

心のひろば



中島満氏
「シオミパイヤの苦闘」より

ブーケンビル
(墓島) にて

夙川校区
唐草中尉こと遠藤 毅

所要の報告を済ませた昭和20年正月2日、中隊長の厚意でヌママヌマの野戦病院に担架で入院した。消毒液も不足で黄色のリバノール液は薬瓶から膿の臭いがした。病院の食糧は親指ほどの芋が朝夕と部下が採ってきた椰子の実で命を保った。若い椰子の実果汁は

ラムネの味、実は烏賊の刺身の味で美味だった。

そのうち私はマラリアに罹患し、高熱が続いたものの投薬はなく、たまらず裸になって軍刀を振り回し暴れだした。そのため両手両足を床に縛り付けられウツラウツラと夢を見る日々が続いた。ある日聯隊長殿が見舞いに来られ、首も縛られていたのを「大分快くなっているから首をゆるめてやったら」と言われたところ、私は夢の中で柔道で首を絞められており、聯隊長に「もっと練習してから外します」と答えたとか。「まだ、快くなってないなあ」と言って帰られたと後で聞いた。

12・1月の行事予定		
12月10日(水)	三役会	10:00
	理事会	13:30
1月14日(水)	三役会	9:30
	理事会	10:30
	新年互礼会	12:30
2月6日、13日、20日各(金)	カラオケ教室	13:00
10日(火)	三役会	10:00
	理事会	13:30

高熱がいつまで続いたか分からないが、多分、危篤状態だったと思う。死の饞別として将校に限ってマラリアの薬を臂筋注射して「さようなら」だった。今まで私が見た将校20余名全部、注射しても生き還った人はいなかった。私は夢の中で、わが家に帰り、兄弟と話をしたり、また、家の情景が分かる心地よい気持ちで、あたたかも極楽にいるようだった。花も咲き、動物も動き(象のような、羊のような)、ゆったりした姿を眺めていた。ところが急に苦しくなり、その苦しさは、今まで経験した事がないような苦しさが襲ってきた。もがきにもがいて苦しさに

耐えていたところ、突然、頭のところに大火花が飛び散り「バーン」という音と共に目が覚め、迎りを見渡しても、自分がどこにいるのか分からず、キョロキョロしていた。

当番兵の森下上等兵が「小隊長が気がついた！」と大声を出して喜んでくれた。私のマラリアは脳漿性と言い、脳をやられ、今までに助かった人はないとの話だった。前線の陣地では不死身と言われていたが、病院の軍医さんたちも不死身と言いはじめていた。

その後も、病院生活をし、7月初め線行きを命ぜられ、2基点に。足がまだフラフラで皆で登りは押し上げて下りは綱で引つ張られ苦勞の末前線に着した。

その後、静かな日々が続き、飛行機からジャングル一面にビラが撒かれ「日本降伏、無条件降伏」とあった。本物なのかと静かにしていると米兵も一発も撃ってこずやと「助かったんだ！」と思つた。4日程して「終戦となったのでヌママヌマに帰れ」との命令を受け、何とも言えない明るい気分になった。

第一線小隊長として多くの部下を失い、誠に申し訳なく、いつも彼らの霊に感謝しています。

最後に付言しますが、私がマラリアの脳漿で死に直面していた同じ時期

に、母が私の夢を見て「私が苦しんでいる様」をありありと兄弟に話していた事を知りました。復員してからその話を聞き、このような事が現実にある不思議を神に感謝するばかりです。

(完)

(遠藤氏の体験談は本紙いぶき26年2月・8月・10月・11月と12月号に掲載させていただきました。ありがとうございます。広報部)



編集後記

▶風に舞う木の葉に次なる季節を感じます。今年もあとわずか慌ただしい日々ですが、お変わりありませんか。心にゆとりをもって、締めくくりの月を過ごしましょう。▶今宵はゆっくり“いぶき”を読みながら少数庶民派で政局鍋を囲むのはいかが？柿は二日酔いには効果がありますが、冷え性の方は控えましょう。▶気温差の激しい時です、体調に留意し安全第一に。明るい年を迎えましょう。